

水稲管理のポイント（わが家の稲作設計書追加資料）

JA 伊勢

伊勢志摩地域農業改良普及センター

① 中干し

■ 中干しの目的

- ・土壌中への酸素供給やガスの発生抑制による根の健全化、無効分けつの抑制、倒伏防止、コンバイン収穫性確保など。
- ・梅雨入り前に一度軽く干しておくとともに、排水が悪いところでは溝切りを実施しておくとう管理が楽になります。

■ 中干し開始時期

50株植え → 茎数 20本/株

60株植え → 茎数 17本/株 となった時期。

・移植後35～40日頃が目安ですが、こまめに茎数を確認し適切な時期に開始するようにしましょう。

・近年、温暖化により移植後の気温が高くなる傾向にあります。昔に比べ、茎数の増加スピードが速くなっているため注意が必要です！

■ 中干しの強弱

・中干しは、田面に軽く亀裂が入り、足跡が少しく程度が適正です。

・田面が大きくひび割れるような強すぎる中干しは、根を切断し生育に影響（生育が強く抑制されたり、出穂期からの養分吸収が十分にできないなど）しますので避けてください。

・また、以下を参考に土質や水稲の生育状況（茎数）に合わせて実施してください。

やせ地、乾田、茎数少ない 場合 → 弱い中干し

肥沃地、湿田、茎数多い 場合 → やや強い中干し



② 中干し後の水管理

- ・中干し終了後は、間断灌水（水が無くなったら入水する）とします。
- ・水温が高くなると根腐れが発生するので暑いときに水を張りっぱなしにしないよう注意が必要です。
- ・間断灌水ができない水田は、足跡に水が残る程度の水管理とします(飽水管理)。

③ 出穂期の水管理

出穂期の前後は、水稻の生育で最も水を必要とする時期です。水が不足すると、幼穂の生育や稔実が悪くなるので、水を切らさないようにしっかりと灌水する必要があります。ただし、当管内の出穂期は、夏の高温期と重なり水温が高く推移しやすいため、細やかな水管理が必要となります。

- ・出穂期前後（7月中）は、浅水湛水（田面の水を切らさない）とします。
- ・8月頃から間断灌水（水がなくなったら入水する）に切り替えます。
- ・入水は涼しい時間帯に行い、可能な範囲で新鮮で冷たい水を供給する。（夜間入水など）

④取りこぼし雑草対策 ～中期剤・後期剤～

・ヒエや広葉雑草の発生があるほ場では下記の表を参考に、雑草の種類を確認し、早めに防除してください。

農薬名	対象雑草※	移植後日数	収穫前日数	使用方法
サンパンチ 1キロ粒剤	多年生広葉雑草、 キョウズメルI等	移植後 15日～ ノビエ 3.5葉まで	60日前 まで	湛水散布
レプラス ジャンボ	一年生雑草、多年 生広葉雑草等	移植後 14日～ ノビエ 4葉まで	60日前 まで	小包装(パック)のまま 投げ入れる (湛水散布)
フルスコアZ ジャンボ	一年生雑草、多年 生広葉雑草等	移植後 5日～ ノビエ 3.5葉まで	60日前 まで	小包装(パック)のまま 投げ入れる (湛水散布)
バサグラン液剤	広葉雑草全般	移植後 15～55日	50日前 まで	落水又はごく浅く 湛水
ツイゲキ 豆つぶ	ウリカワ、クログ ワイ、オモダカ、 ヒタゴボウ等	移植後 20日～ ノビエ 4葉期まで (稲 5葉期以降)	60日前 まで	湛水散布
クリンチャー ジャンボ	ノビエ、キョウズメ ルI	移植後 7日～ノビ エ 4葉期 (1.5倍量の散布で ノビエ 5葉期)	30日前 まで	小包装(パック)のまま 投げ入れる (湛水散布)
トドメ MF 乳剤	ノビエ、アゼガヤ キョウズメルI等	移植後 14日～ ノビエ 7葉期まで	50日前 まで	湛水散布または落 水散布
ロイヤント乳剤	ノビエ、ウリカ ワ、コナギ、クサム、 ヒタゴボウ等	移植後 20日～ ノビエ 5葉期まで	45日前 まで	落水又はごく浅く 湛水

※対象雑草は、紙面の都合上、ラベルに記載のある情報の一部を抜粋して記載しています。詳しくは、使用量・使用回数・使用期限も含め、必ずラベルを確認してください。

⑤いもち病対策

・稲の収量や品質に大きな影響をもたらすのは穂いもちですが、穂いもちの感染源は葉いもちであるため、効果的な防除を行う為にも、普段の観察をしっかりと行い早期発見をすることが大切です。

<葉いもち> 置き苗は早期撤去を！！

- ・例年、初発は6月中下旬ごろです。早期防除を心がけて下さい。
- ・低温（感染適温は24度）で曇りや雨が連続すると発生し始め、条件が揃えば一気に広がります。今後の情報や、「いもち病発生予測支援システム（ブラスタム）<https://www.pref.mie.lg.jp/byogai/hp/39584007416.htm>」を参考にし、発生条件が揃ったら、予防防除を徹底してください。
- ・置き苗、風通しの悪い田、葉色の濃い田、山や建物の陰で日照不足になりがちな朝露の乾きにくい田、過去にいもち病が発生した田などで多発しますので注意してください。
- ・既に発生してしまったほ場ではブラシンプロアブル、粉剤 DL で防除して下さい。

<穂いもち>

- ・穂いもちは発病してからの防除では手遅れです。予防を徹底して下さい。

■薬剤例と使用時期

* 「出穂期」とは、「圃場全体の約半分の茎から穂が出た状態」のことです。

4/21 移植における出穂期の平年値は 7/21 です（玉城町勝田）。

<予防>

- ・オリゼメート粒剤 （葉いもち → 初発 10 日前～初発時）
（穂いもち → 出穂 3～4 週間前；但し収穫 14 日前まで）
- ・コラトップジャンボ P （葉いもち → 初発 20 日前～初発時）
（穂いもち → 出穂 30～5 日前）

予防的に使用することが重要。

<発生後>

- ・ブラシンプロアブル・粉剤 DL （収穫 7 日前まで）
→病斑の進行を止めますが、発生した病斑を直すことはできません。

※農薬を利用する際は必ずラベルで確認し、適正に使用してください※

⑥白未熟粒の発生メカニズムと対策

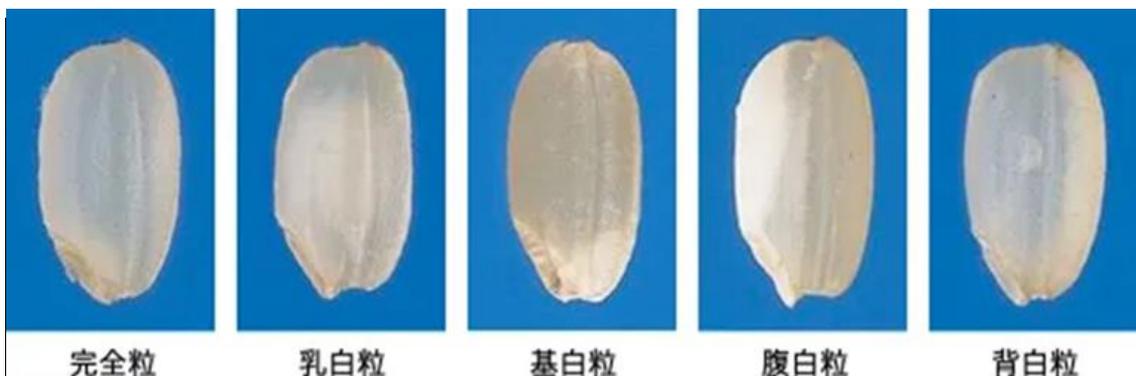
・白未熟粒（基部未熟粒、背白粒、乳白粒など）とは、もみ内の胚乳に十分なデンプンが蓄積されないまま登熟が終了してしまった粒のことです。デンプンが不十分なところは隙間となり、光が乱反射するため白濁して見えます。

・登熟期間が高温や低日照であると発生しやすくなります。また、ため込んだデンプンに対して粒数が多すぎた場合や、生育後半の窒素栄養不足で光合成能力が落ちた場合も発生しやすくなります。

<対策>

1. 初中期の生育を過剰にしない（肥培管理、適正な中干し、水管理、植付株数の抑制）。
2. 出穂期まで高温で推移し、その後の登熟期間中も高温で経過すると予想される場合は、後半の穂肥に重点をおく。
また、耐暑肥を施用することも有効。
（出穂期に窒素成分で1～2 kg/10aの追肥を施用する）
3. できる限り、収穫前ギリギリまで落水しない。
4. 夜間入水を行う。

白未熟粒の見本



米粒の成長は、開花後、長さが1週間、幅が2週間、厚みが4週間で決まります。米粒は厚みがあるほど食味がよくなります。米粒の厚みは、開花後約1ヶ月間太り続けているので、早く落水した水田ほど痩せた米になります。少なくとも開花後約1ヶ月間は土壌を湿潤状態に保ちましょう。

また白未熟粒の白濁部位は、デンプン蓄積の以上があった時期を反映しています。すなわち、胚乳中心部に白濁をもつ「乳白粒」では登熟初中期に、「背白粒」や「基白粒」などは登熟後期にデンプンの蓄積異常があったと推定されます。

⑦ 登熟向上資材の施用

■珪酸加里

- ・根の活性を促すとともに茎葉を強化し、倒伏や病気に強い稲を育てます。蒸散作用を高め、夏の高温による品質低下を防ぎます。
- ・出穂40～45日前に施用します。30～40kg/10a（遅れると効果が劣りますので早めに施用します）。

■マルチサポート1号

- ・苦土、珪酸、微量元素を含みます。
- ・米の食味を高める苦土が主体の資材。けい酸も含み、稲の倒伏軽減や耐病性の向上も期待できます。
- ・出穂40～45日前に施用します。20～40kg/10a

⑧ 収穫

- ・近年、刈り遅れや乾燥調製の失敗による品質低下が目立ってきています。
- ・刈り遅れは、胴割れ粒、茶米の発生、玄米光沢の悪化を助長するほか、食味にも直接影響します。下の方法を参考に適期収穫に努めましょう。

<収穫適期の判断方法>

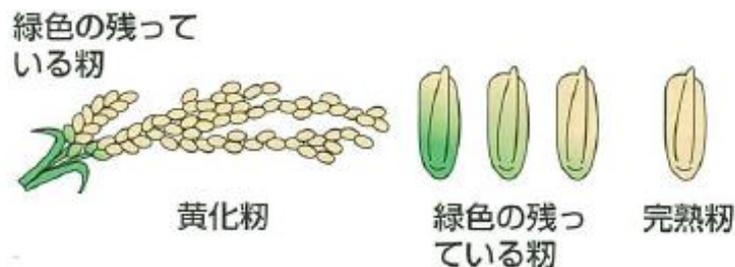
以下の方法をいくつか組み合わせて判断してください。

① 籾水分による方法

水分計を用いる。「コシヒカリ」は28～26%が適期。

② 緑色籾数による方法

穂の基部に3、4粒の緑色籾（籾全体が緑色）が残るころが適期。生育中庸な株で判断。



③ （出穂期後の日数による方法）

年次変動が大きいので目安に留める。「コシヒカリ」では、33～35日程度（出穂後の積算気温で900～950℃）。

<乾燥調製の留意点>

- ・収穫後できるだけ早く乾燥機に張り込む。高水分粳では注意が必要。
- ・高温での急激な乾燥は避ける。乾燥による水分減少率を毎時 0.8%以下にする。特に、高水分の粳ほど初期の温度を低温（通風）にして乾燥する。
- ・仕上げ水分は 14.5~15.0%を目標に過乾燥や水分過多にならないように注意する。

⑨ 雑草イネに注意！！

一部地域で「雑草イネ」が増えています。三重県内で発生している「雑草イネ」は、玄米の色が赤く、軽く握るだけで粳が落ちるといった特徴を持っています。古代米や栽培品種の赤米とは異なります。栽培イネより草丈が高いことが多く、出穂始期では粳の先端が赤くなります。そのまま刈り取ると、収穫物に赤色の玄米が混じり、品質低下の原因となります。放置すると3~4年で蔓延し、高コストの防除が必要となります。見つけたら早い段階で抜き取るとともに、関係機関（JA、普及センター）に相談して下さい。

